

「今日の説教、聴き手のために」 (講壇-11) 2015/2/15 明治学院教会

『み言葉は、わが足の灯』

岩井健作 (前牧師)

詩編 119 編 105-112 節

- 1、詩編 119 編は詩編のなかで最も長い詩、「いろは歌」です。ヘブル語のアルファベットを頭文字にした8行の詩が22連、続いています。「律法」(本文では「あかし」「み言葉」「法」「定め」「命令」「戒め」「ことば」「律法」の八つの言葉で表示)の大事さを指摘します。この詩の「生活の座」(背景)は、歴史的にはイスラエル民族がバビロニアの捕囚の後期に、富める者は外国の支配者に馴染み、異教化された中で、唯、主の掟を単純化して信じた底辺層の詩人の詩だと言われています(関根)。彼らが、足の灯として、「律法の本質」を信じて、迷わなかった実践的教訓詩です。(現代日本に例を取れば、米国の新自由主義の富中心に媚びて戦争も肯定する風潮の中で、お金ではなく「命と暮らしを守れ」、と単純に叫んでいる庶民の感覚のようなものです)。個々の契約(守るべき法)ではなく、律法の本質を非常に単純化して大事にします。
- 2、今日の箇所の「み言葉は」は「ダーバール(言葉)」というヘブル語です。「後ろから前へ押し出す」という意味で、言葉の力が強調されます。母親の言葉が子どもの背後から力になるようなものです。哲学者の鶴見俊輔さんが戦後鬱で何も出来なかった時、隣の部屋で遊んでいた、子どもの「いろはがら」を聴いて自分でも「いろはがら」を作ったのが戦後の彼の哲学の営みのきっかけだったそうです。(『日常的思考の可能性』1967筑摩「かるたの話」)。「カルタ」には不思議な力があります。彼は自分の「カルタ」を作ることすすめています。言葉の力が発揮されます。
- 3、私は、神学校を出て、牧師になってからは、毎週説教をした訳ですが、「先生の話は、難しい(観念的)」と言われて大変悩みました。先輩の牧師に相談をしました。彼は寄席やお芝居に通って、笑いと涙の感動に共感する事が生活になっている人です。駄洒落のうまい人で、説教の中で、みんなを一回は笑わす、という特技を持った牧師です。君には無理だろうな、と言って、諺を使ってみたらどうだろうか、というアドバイスをしてくれました。それは神学の体系的言説を、経験的・生活的な知恵に翻訳をするということでした。例えば「あなたの隣り人を愛せよ」は「向かう三軒、両隣り」を使って表現する如く。認識情報(神学)を行動情報(信仰の証詞)に置き換えるといってもよいと思います。「雨だから気をつけなさいね」。人生最後に母が、息子(老練な医師)に語ったのを聴いて感動した事があります。また、介護を「掛け替えのない」時とした事を証する一通の手紙のことを思い出します。「道の光」とは人生の希望という意味でしょう。しかしそれは、道全体を浮かび上がらせるような光ではないのです。「歩みを照らす灯」なのです。僕らの子ども時代は提灯でした。今は懐中電灯です。それもLEDです。「言葉は肉となってわたしたちの間に宿られた」とはイエスその人を示した新約のヨハネの言葉です。それは「足の灯」である導き手なのです。「肉」は抽象概念ではなくて、目に見える、日々を活かす道しるべなのです。祈ります。